

楞伽經の Dharma と Bhāva

神 谷 麻 俊

楞伽經を理解する場合に、どうしても明確にしておかなければならぬものの一つは、dharma と bhāva の区別がある。先ず、本經に於ける二つの梵語に対する訳語を挙げてみる。

宋訳	魏訳	唐訳
----	----	----

dharma	chos 法 (まれに性)	法, 法体	法
--------	---------------	-------	---

bhāva	[dhos po, 性, 有性, yod pa, チリミル 識] 法, 有, 有法, 法体, 法, 有, 有性, 有物		
-------	---	--	--

yod pa	チリミル 識	法, 有, 有法, 法体, 法, 有, 有性, 有物	
--------	--------	----------------------------	--

anye punar mahāmate	karaṇādhamān	sarvadharmaṃ	diṣṭvā
---------------------	--------------	--------------	--------

nirvāṇa-gaṭi-buddhaya	bhavati/
-----------------------	----------

に於て斜体部分は、	dhos po	thams cad	びあり、	逆に次の例のよう
-----------	---------	-----------	------	----------

に、	bhāva	に於て	chos	が相対する	とある。
----	-------	-----	------	-------	------

ksāṇa-sampratī-prābandhābhāvāc	ca	anyathā-bhāva-darśanān
--------------------------------	----	------------------------

mahāmate	niṣvabhāvāḥ	sarva-bhavāḥ/
----------	-------------	---------------

では、斜体部分は	chos	thams cad	とある。
----------	------	-----------	------

次に漢訳に目を転ずると、	dharma	に対しては、	まれな例外を除
--------------	--------	--------	---------

いて三本とも「法」が当てられている。	一方、	bhāva	に対しては、
--------------------	-----	-------	--------

宋訳では、「性」・魏訳では、「法・有・有法・法体」、	唐訳では、「
----------------------------	--------

「法・有・有性・有物」などの語が当てられている。	宋訳は、	dharma
--------------------------	------	--------

には「法」、	bhāva	には「性」と明確に区別を与えていると思われ
--------	-------	-----------------------

るのであるが、	魏訳と唐訳では、	bhāva	に対しては「法」を当て
---------	----------	-------	-------------

しかも、「法」を当てている場合が大変多いのであるが故に、この二

訳からは、その梵語が何であるか判別できないのである。

このようにみると、	宋訳を除いて、	チベット訳も含め、	魏訳と唐
-----------	---------	-----------	------

訳では、dharma と bhāva の訳語が混乱していると言えそうである。否、むしろ dharma の特殊な使われ方を除いては、これら二つの梵語は、本經では同義と把握することも可能ではないかという考え方も成立しそうである。

さて、もう少しいつの梵語について考えてみたい。まず dharma であるが、これには二つの使われ方に大別できるように思われる。一つは、自内聖智の領域に相応する意味としてである。

evam eva mahāmate pratyārya-gaṭi-dharma-lakṣaṇaṃ bhāvāb-
hava-kudīṣṭi-vinivartanātaya yugapad virāte/

右の文中にある dharma は、自内聖智の領域のあり方そのものを指していると考えられる。もう一つの用法は、遠離されるべきものとしてである。

pratyātmārya-jhāna-gaṭi-lakṣaṇaṃ punar mahāmate sarva-dha-
rma-lakṣaṇābhiniyeśato……pravartate/

(右に大慧よ。各自の内聖智の活動〔領域〕たる特質は、一切法の特質に執着がないが故に……現われる)

とあり、この場合の一切法の特質 (sarva-dharma-lakṣaṇa) は、捨離されるべきものと考えられる。後者のような dharma の使われ方は、本經に於ては、まれながらも時折みられる。また、dharma を考えるときに本經では、五法 (pañca-dharma) を検討しないうけに

はゆかない。五法とは、名 (nāman)・相 (rūpita)・妄分別 (saṃkalpa)・正智 (saṃyag-jñāna)・如如 (tathatā) であるが、本経では、この五法が三自性にくみ入れられており、それが聖智の活動領域に相応していることが言われる。

esa mahāmate *pañca-dharma-svabhāva-laksṇa-pravicaya-nāma dharma-paryāyāḥ pratyātmārya-jñāna-gati-gocaro yatra tva-yānyaiś ca bodhisattvaih śikṣitavyam* //

しかし、次の場合の五法は、遠離の対象になっている。

citta-mano-manovijñāna-*pañca-dharma-svabhāva-ratiṇā mahā-mate sarva-dhammān vibhāvayan bodhisattvo mahāsttvo dharmā-nāitāmya-kṣālo bhavati* //

(大慧よ。一切法は心・意・意識・五法・三自性を離れていると観察しつつ、菩薩摩訶薩は法無我に善通する)

以上のように、五法も二通りの使われ方がなされている。従って本経では dharma には二通りの使われ方があると考えるのである。第一に bhāva についてである。訳語は、前掲した通りであるが、この bhāva は存在を示す言葉であるとされ、そこで有という意味も可能であると言われる。したがって、魏訳と唐訳では、bhāva に対しても「法」という訳語が当てられている場合が非常に多いのであるが、この場合の「法」とは、存在するものの意味と解さなければならぬ。そして bhāva は、有無の二元の領域においてのみ言われるのであり、第一義つまり自内聖智の領域では遠離されるべきものであらねばならない。また、本経では、sarva-bhāvās に対しても「一切法」(魏訳・唐訳)と訳しているのがほとんどである。したがって、魏・唐訳からは、梵語が sarva-dharmās か sarva-bhāvās

かの判断は出来ない。この点、宋訳は、「一切法」「一切性」とほぼ明確に使いわけているようである。

以上をまとめると、dharma には二通りの用法があり、一方、bhāva は、聖智の領域では無自性 (niḥsvabhāva) として退けられる。ここに両者の大きな違いがあるように思う。さらに言うならば、dharma は、第一義の領域から有無二元の領域まで広域に於て用られるが、bhāva は、有無の領域に限られる。したがって、両者に対するチベット訳の混乱、また、特に魏訳・唐訳において dharma と bhāva の両者に対して「法」という訳語が与えられることなどから推すると、dharma が有無二元の領域で言われる限り、そのときには、すべての法 (sarva-dharmās) と、すべてのもの (sarva-bhāvās) は、ほぼ同義とみてもよいように考えるのである。同じようなことを、三枝博士は『中論』について既に述べておられる。

- 1 南条文雄博士校訂『梵文入楞伽經』p. 63, ll 16-17.
- 2 同右 p. 76, ll 4-5.
- 3 同右 p. 56, ll 11-13.
- 4 同右 p. 50, ll 6-9.
- 5 同右 p. 68, ll 5-7.
- 6 同右 p. 69, ll 11-13.
- 7 三枝充憲博士「中論における法の研究」(平川博士還暦記念論集『仏教における法の研究』) p. 196
- 8 同右